

No. 973

'72 ミュンヘン

—オリンピック第一報—

若人の祭典、第20回オリンピックミュンヘン大会。36年前の軍国調一色に塗られたベルリン大会とは違って、平和の祭典にふさわしい華やかさと明るさの中で8月26日、開会式が開かれました。史上最高の122ヶ国約1万人の選手団の入場行進。日本は46番目に入場。

ポンチョ姿にリンブレロのメキシコの楽団が民族音楽「マリアッチ」を奏でながら登場。

五輪旗はメキシコ市長からミュンヘン市長に手渡されました。4大陸の若者にかこまれ西ドイツのギンターツァー君が聖火を掲げて登場。聖火台をかけるのぼる。点火。生命の讃歌のようにバイエルンの空に燃え上る聖火。オリンピック史上初の女性、西ドイツ陸上選手ハイジシュラー嬢が力強く宣誓。27日から21競技195種目にわたる熱戦の火ぶたは切られた。

今回からはじめてとり入れられたカヌースラローム。人工的に作られた流れの中をたくみにカヌーをあやつる各選手。

水の申し子、スピッツ選手は、その強さをまざまざと見せつけた。

(日本時間)9月5日午後0時30分、5人のアラブゲリラが選手村のイスラエル選手団の部屋に侵入。

(日本時間)9月6日午後まで11人の選手団が射殺されるというオリンピック史上まれな事件が起きた。

ゴールドメダルストユダヤ系のスピッツ選手も急いで帰国。

ローデシア締め出し問題でももめた今大会は、複雑な中東情勢までも抱え込むことになってしまった。オリンピックは「平和の祭典」という。しかし政治が介入せざるを得ない現実の中でそれは理念でしかない。中止という危機を迎えた第20回ミュンヘン大会。オリンピックの在り方は今後、真剣に問われなければならない。

日米新時代への動き

—田中・ニクソン会談—

日本時間の8月31日ヒッカム米軍基地に違例の歓迎で経済大国日本の首相を迎えるニクソン大統領。

7ヶ月前日本の頭越しに決定されたニクソン中国訪問。

ニクソン大統領は28日、来年の6月までに徴兵を廃止することを発表し、レアー国防長官は南ベトナムのアメリカ軍はすでに3万7000人に縮少されたと報告している。

太平洋に浮かぶハワイで2日間という短い日程の中に進められている日米首脳会談。

中国訪問を控えた田中首相と大統領選を目前にしたニクソン大統領第1回会談は3時間にわたり太平洋を一望に見降ろすクイリマ・ホテルの大統領の間で行なわれた。外相を交えての第2回会談。

翌日太平洋戦争で死んでいったアメリカ兵の墓、パンチボウル基地に向った田中首相と大平外相。

昭和26年以来サンフランシスコ体制のもと、アメリカのカサのもとにいた日本が経済大国に発展した今、国際社会の一員として生きようとしている。そして今、太平洋地域での日本のはたす役割が問われている。

日米安全保障条約を維持しながら日中国交正常化が可能であることを確かめあった田中首相ニクソン大統領。

しかし台湾条項、極東条項をめぐって日本の国内基地の存在が動揺している中でこれからの安全保障条約は、日本の経済は、日本とアジアとの関係はどう変わっていくのだろうか。